

ニューヨーク大学 (NYU) 留学記

TAMURA, Akiko / 田村, 晶子

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / 経済志林

(巻 / Volume)

78

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

359

(終了ページ / End Page)

373

(発行年 / Year)

2010-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007022>

【学界消息】

ニューヨーク大学 (NYU) 留学記

田 村 晶 子

はじめに

私は2007年4月から2009年3月まで、ニューヨーク大学 (New York University) 経済学部 (正確に言うと経済学科:Department of Economics) で、客員研究員 (Visiting Scholar) として、研究を行う機会を得た。ニューヨーク大学を在外研究先に選んだのは、私が1991年～1996年まで博士課程に在籍したBoston UniversityでのPh.D.論文指導教員のProfessor Jonathan Eatonがいるからであり、在外研究の全期間において指導を受け、共同研究を行うことができた。最近は、アメリカの大学で客員研究員の受け入れが厳しくなっているといわれる中、Eaton先生のおかげで快適な研究環境を得ることができた。帰国して、あっという間に1年余りが過ぎてしまったが、このエッセイでは、ニューヨーク大学で学んだ研究内容そのものよりも、ニューヨークでの生活をも含めた、ニューヨーク大学での留学生生活を振り返ってみたい。

ニューヨーク大学 (NYU)

「留学先はニューヨーク大学です」と言うと、「どこにあるニューヨーク大学ですか?」と聞かれることが時々あった。この人たちは、ニューヨー

ク州各地（AlbanyやBuffaloなど）にキャンパスを持つニューヨーク州立大学（State University of New York: SUNY）と勘違いしている。また、ニューヨーク市立大学（City University of New York: CUNY）と間違われることもあった。ニューヨーク大学（New York University: NYU）は、マンハッタンのグリニッジビレッジ周辺にある私立大学である。大学の中心は、ワシントンスクエア・パークの周辺であるが、ユニオンスクエア以南から大学のビルが点在しており、街角で写真1のような地図を見ることができる。ニューヨーク大学の青紫色の旗が、大学の建物である目印となっている（写真2）。経済学部は、西4丁目19（19 W. 4th Street）のビルの5-8階にあり、その昔は帽子製造工場であったとのことである。経済学部の向かいにあるビジネススクール（Stern School of Business, 写真3）は、大学の建物らしい立派なものであったが、他の大学の建物は、昔からあったビルをそのまま利用しているものが多いらしい。このように街に点在するキャンパスの様子は、私が大学院に5年間留学したボストン大学とよく似ている。近接するワシントンスクエア・パークでは、のんびり昼食をとり、くつろぐ学生が多くみられた（写真4）。

マンハッタンという場所柄、ニューヨーク大学経済学部では研究室のスペースが非常に不足しているとのことだったが、Eaton先生の尽力により、7階にClark Durantとシェア（2人部屋）で研究室をいただくことができた。ボストン大学でもそうだったように、ここでも教員は多くの時間に研究室の扉を開けており、気軽に研究の話をしに来る雰囲気があった。そこで、特に7階に研究室を持つ若手の教員を中心に研究のことやその時の関心事を話す機会が持てた。オフィスメイトのClarkは、ジョージ・メイソン大学で博士号をとったばかりのPost-doctorial Fellowであり、修士課程の政治経済のクラスを教えていた。研究分野が違うので、研究のことを話すことはほとんどなかったが、いろいろな話ができる。例えば、彼のガールフレンドに折り紙を送りたいとのことで、インターネットで折り紙の折り方を探して一緒に折ったり、オバマ大統領の就任式をワシントンに見に行っ



[写真1] 大学周辺でみられるニューヨーク大学の地図



[写真2] W4th Streetの経済学部のあるビル周辺とNYUの旗



[写真3] ニューヨーク大学ビジネススクール (Stern School of Business)



[写真4] ニューヨーク大学に近接するワシントンスクエア・パーク

た彼から号外新聞をもらったりした。また、Eaton先生以外にも、ボストン大学時代の恩師が3人（Douglas Gale教授、Raquel Fernandez教授、Debraj Ray教授）、ニューヨーク大学に移ってきていて、私のことを覚えていてくれており、孤独になりがちな客員研究員の身分としては、とても良い研究環境であった。



[写真5] 私のNYU カード

ニューヨーク大学で、ボストン大学とはかなり違っていたのは、そのセキュリティの厳しさであった。大学のどの建物にも警備員が多数いて、学生証（NYU Card:写真5）がないと、パスポート等の身分証明書を見せないと入れない。学生証には大きな顔写真があり、有効期限も大きく明記されている。学部学生が多く利用する教室がある建物では入口と出口が分かれており、入口でのセキュリティチェックは徹底していた。時々何があったのか（「誰かがかばんを置いて立ち去ったらしい」とその場にいた学生に聞いたこともあった）、多数の警官により道路が封鎖されたりすることもあった。とにかく街角にも地下鉄の駅でも多数の警官がいて、ニューヨークが安全になった理由が良くわかった。

アストリアでの暮らし

ニューヨーク大学はマンハッタンにあったが、大学のそばに住むことは家賃の面で非常に難しかった。2007年3月に私が探したところでは、大学周辺では、小さなワンルームでも月家賃が最低3000ドルはしていて、少しでも安いところを探すと、マンハッタンでもニューヨーク大学からは遠いアッパーウエストやアッパーイーストになってしまう。そこで、ニューヨーク大学へ地下鉄（N, W線）で乗り換えなしに約30分で行かれるクィーンズ区アストリアにアパートを借りた。マンハッタンでみた狭く古い部屋と

は違って、1ベッドルームで広々としたきれいな部屋で快適な生活ができた。

「外国人は現金を出さないと信用されない」とのことで、「最初と最後の月の家賃+敷金2カ月分」の4カ月分の家賃を契約時に現金で払ったが、帰国後に敷金は全額返ってきた。携帯電話の契約でも、外国人は「Credit History」がないので厳しいと言われたが、私は前回の留学時に大学でリサーチアシスタントとして4年間働いていて、ソーシャル・セキュリティ・カードも持っていたため、「Credit History」が確認され、契約を結ぶことができた。

ボストン大学に留学中の1990年代前半に何度かニューヨークを訪れた際には、「ニューヨークの地下鉄は危険」という評判から地下鉄に乗ったことはなかったが、ニューヨークの治安はすっかり良くなって、地下鉄も安全になっていた。朝の激しいラッシュを経験することはなかったが、帰宅が6時頃になると地下鉄は非常に混雑していた。日本と違う点は、(少なくとも午後のラッシュでは)乗客が無理して混んだ列車に乗らず、次を待つ人が多いことである。ボストンの地下鉄は時刻表がなかったが、ニューヨークの地下鉄の時刻表は一応あった。しかし、時刻表が駅に明示されることはなく、誰も時間通りに来ることを期待していない。ニューヨーク大学からアストリアへ向かうN(快速)とW(各駅)の地下鉄はほぼ各10分おきに、つまり5分に1本が交互に来るはずだが、10分以上来なかったり急に続けて来たりした。特に驚いたのは、前の電車の遅れにより電車の間隔がつかると、各駅(W)が急に快速(N)になってしまうことである。私の利用していた駅(30Av)をはじめ、アストリアでは各駅のみ停車する駅が多いので、「これから快速運転になります」という突然のアナウンスで多くの乗客が電車を降りて後続の電車を待つことがしばしばあった。そんなことにも慣れてしまうと、ニューヨークでの交通は東京にいるように快適で便利なものであった。

アストリアという場所は、もともとはギリシャ人の多く住む場所であり、

確かにギリシャ料理のレストランやカフェなどが多くあったが、歩く人々は、ギリシャ人よりインドや中東系と思われる人が多く、多民族の住む地域であった。マンハッタンにあるピリピリとした雰囲気には比べかなりゆるんでいる感じで、静かで暮らしやすかった。特に部屋を見つける前にマンハッタンのミッドタウンの短期アパートにいた時には、夜通しごみの集める音やサイレンが聞こえていたが、オーストリアでは、夜遅くまでカフェやスーパーは開いていたが、静かな夜であった。

ニューヨーク大学での授業の聴講

私はEaton教授と共著論文が2本あり、いずれも2国間貿易と直接投資にかかわるものである。特に”Bilateralism and Regionalism in Japanese and U.S. Trade and Direct Foreign Investment Patterns”, (*Journal of the Japanese and International Economies*, 1994) で用いた計量手法—日本の国別産業別対内直接投資など0の多いデータに対応するためにTobit推定を応用しThreshold (閾値) を推定した最尤推定法—について、近年、この推定法と新しい推定手法を比較し、よりすぐれた推定手法が提案されていることが議論された。新しい手法は、Quasi- Poisson Maximum Likelihood Methodを応用したものである。また、2国間貿易と直接投資を、企業の投資選択のレベルから分析することも議論された。

Eaton教授との共同研究とともに、今回のニューヨーク大学留学の大きな目的は、私が大学院卒業後に進んだ経済学の技術、特に計量経済学の技術の習得であった。そこで、Eaton先生の推薦により、個々の教員に許可を求めて、大学院 (Ph.D. コース) の授業を聴講させていただいた。ニューヨーク大学経済学部のPh.D. コースはセメスター制 (1年2セメスター) で、1年次に、ミクロ経済学I, II, マクロ経済学I, II, 計量経済学I, II, 経済数学I, IIを履修し、2年次には、ミクロ計量経済学, マクロ計量経済学と、各自の分野別 (フィールド) の科目を履修する。3年次以降はセミ

ナー・ワークショップで研究報告をして博士論文を完成させる。興味深かったのは、コア科目のミクロ、マクロ、計量経済学の1セメスターの授業を前半・後半に分けて、2人の教員により講義がなされ、毎週の宿題とともに上級院生によるTAセッションもあり、極めてインテンシブな授業となっていて、教育効果が非常に高かったことである。私はコア科目の計量経済学I、IIとミクロ計量経済学、フィールド科目の国際経済学I（貿易）、国際経済学II（国際マクロ）、上級マクロ経済学、産業組織論IIを聴講した。インテンシブなコア科目を聴講したので、2007年入学の院生たち（20名ほど）とは良く知りあうことになった。この学年には日本人が2名いたが、他の学年には日本人はいなかった。学生の出身はヨーロッパや南米が多く、アジア系は中国人がほとんどであった。

・計量経済学I, II

Stoye教授（前半）/ Flinn教授（後半）による「計量経済学I」, Ludvigson教授（前半）/ Lee教授（後半）の「計量経済学II（前半部分のみ聴講）」の授業、およびTAセッションに出席した。Stoye教授の授業は、私も法政大学大学院で院生と輪読したことがある、林文夫教授（Hayashi）の「Econometrics」がテキストであり、Generalized Methods of Momentsを中心とする計量手法が講義され、計量経済学のブラッシュアップに役立った。Flinn教授の授業は、主にFlinn教授の労働経済の実証論文（難解な論文で多くがEconometrica掲載論文）をもとに、計量手法の実際の応用が講義なされた。Ludvigson教授の「計量経済学II」では、私もボストン大学の院生の時に勉強したHamiltonの時系列のテキストが使われ、良い復習になった。TAセッションは、博士課程3年の院生により週に一度行われていたが、授業の基礎となる数学などをほとんど独立した授業として行っていた。

「計量経済学I」（特に後半）の授業は特に難解であったのに、院生は時々良い質問をしていたので、「さすがにレベルが高い」と感心したが、あとで学生たちに事情を聞くと、やはりほとんどの学生はよく理解できなかった

ようである。ときおりほっとするような基本的な質問をする学生もいたが、「良くわからない」にもかかわらず効果的な質問ができるのは、日本とは違う教育の成果なのであろう。

・マイクロ計量経済学

若手 (採用2年目) のWiswall教授によるとても技術的な授業で、テキストは、Cameron and Trivedi [2005] *Microeconometrics: Methods and Applications*である。非常に難解な講義であったが、宿題でMatlab (私はGAUSS) を使って実際にプログラムを作り推定を行ったところは何とか理解できた。受講している院生が「まったく理解できない」と教員に訴える時もあったが、数学に強い計量経済学専攻の学生は宿題もすぐに提出して、授業にもしっかりついていっていたようである。主要な科目ではあったが、必修型科目ではないらしく、出席者は必修科目の「計量経済学I, II」の半分以下であり、その出席者の半数以上をアジア系の学生が占めていて、彼らがあまり質問せず静かに授業を受けていたのが印象的だった。前述の「計量経済学I」とは全く違った静かな雰囲気であった。

・国際経済学I (貿易), 国際経済学II (国際マクロ)

Eaton教授の「国際経済学I (貿易)」, Yue教授の「国際経済学 I I (国際マクロ経済学)」に出席した。Eaton教授の「国際経済学 I (貿易)」では、伝統的なりカードモデル、ヘクシャー・オリーンモデルに加えて、企業レベルの貿易理論のモデルや、研究開発および技術移転と貿易との関係などを議論した論文が講義された。聴講者には他の客員研究員や若手専任教員 (後述「上級マクロ」担当のViolante教授など) もおり、授業では活発な議論が行われた。宿題にはプログラムにより数値解答を求めるものもあり、とても興味深かった。貿易政策の話題で、アルゼンチンの留学生たちがアルゼンチンの不整合 (不合理) な政策について語り、恥ずかしそうにしていたのが印象的であった。

Yue教授の「国際経済学II（国際マクロ経済学）」では、カリブレーション等の最近のマクロ経済の手法を多く取り入れた分析、特に、国際的なビジネスサイクルの動きの分析が興味深かった。

・上級マクロ経済学

若手のViolante教授が担当であるが、後半4回を著名なSargent教授とLjungqvist教授が講義した。ここでは、主に労働経済学への応用として使われた計量手法を勉強することができた。さらに、Sargent教授とLjungqvist教授の講義では、ヨーロッパの失業問題を解明する理論モデル（アイランドモデル等）が講義され、非常に興味深かった。また、この講義では、補講が夜の授業になった時など、みんなでピザを食べながらの活発な議論が行われ、著名なSargent教授とも気楽に話すことができ、とても印象深い経験になった。60歳を超えるSargent教授が、Violante教授の講義にも常に出席し、熱心にタブレットPCに手書きでノートをとる姿は印象的であった。

・産業組織論II

採用されたばかりの若手のXu教授による授業で、主に数量的な分析手法が扱われ、様々な計量手法の産業組織論への応用を学んだ。アメリカでは個々の家計の細かい消費行動などの様々なマイクロデータを使って、実証分析が行われていることを改めて知り、日本にも同様のデータが入手可能になると良いと思うが、このようなマイクロデータの計量にはかなりの根気が必要そうである。出席者は経済学部の学生よりビジネススクールの学生が多く、計量専門ではない学生は、授業が理解しがたいようであった。

・グローバル経済

私が聴講できる最後のセメスターとなった2008年秋学期には、私の教師としての勉強、教育手法を学ぶために、Eaton教授の学部上級生向けの「グ

ローバル経済」の授業を聴講させていただいた。この授業には、40-50名ほどの学生が出席していた。基礎科目の「国際経済」ではなく、応用／上級の授業のため、特に新しく興味深いトピックが選択されていた。また、当時大きな話題となっていた世界的な金融危機とアメリカ政府およびFRBの対応など、その時々国際経済をめぐる時事的な話題などが、毎回の授業の最初に数分ほどEaton教授から雑談風に話され、数人の学生が質問や意見を述べており、とても興味深かった。大学院の授業では世間で話題になっている金融危機のことなど何も話されない状況（院生は理論の習得にただただ一所懸命のよう）であったので、この学部の授業は私にとって、「教育的な」意味だけではなく、授業の内容もとても興味深いものとなった。この授業の難易度は、法政大学においては学部上級というより大学院修士レベルのものであった。法政大学の授業支援システムに似た「Blackboard」というサイトで、授業でのパワーポイント資料や論文、さらに練習問題の配布と提出、さらにレポートの提出が行われていた。

ニューヨーク大学でのセミナー

ニューヨーク大学では、各分野のセミナーが毎日行われている。セミナーでは、主に外部の研究者を招いての論文のプレゼンテーションが行われ、出席者と活発な議論が行われる。出席者は、その分野に関心のある教員と院生であり、人気のあるマクロ経済学セミナーでは50人以上、専攻者の少ない計量経済学セミナーでは10数名が出席していた。私は、火曜日の国際経済学/開発経済学セミナー、木曜日のマクロ経済学セミナー、金曜日の計量経済学セミナーに主に出席した。また、ニューヨーク連邦準備銀行と共催の貿易セミナー（FRBNY-NYU Trade Seminar）も開かれ、ニューヨーク連邦準備銀行でセミナーが開かれた。

ニューヨーク連邦準備銀行に入るには、非常に厳しいセキュリティチェックがあり、出席する場合には事前の登録が必要になっていた。ニューヨ

ーク連邦準備銀行は9・11テロの「グラウンド・ゼロ」に近く、最初に行った時、Googleマップで探した最寄駅のCortlandt Streetで降りようとしたところ、まだテロ後の復旧がなされずに廃墟のようになっていて止まらずに通り過ぎてしまい、次の駅から歩いた。2007年には、「グラウンド・ゼロ」も廃墟と言うよりも「工事現場」であったが、2009年に帰国するまで、工事現場の状態はあまり変わらず、復興は遅れているようである。

ニューヨーク大学のセミナーでは、かなり著名な学者の報告を多く聞くことができた。特に興味深かった論文を抜粋すると、FRBNY-NYU Trade Seminarでは、Princeton大学のMelitz教授による“Dynamics of Firm-level Adjustment to Trade Liberalization”が報告され、近年注目されている企業レベルのマイクロデータによる貿易の実証分析のためのモデルが展開された。ニューヨーク大学におけるマクロ経済学セミナーは、学部長でもあるSargent教授の影響のためか、極めて理論的色彩が強く、実証論文が少ない点が残念であるが、Virginia大学のVan Wincoop教授の“International Capital Flows”では、動学的一般均衡オープンマクロモデルによるポートフォリオ選択について、非常に実証的にも興味深い手法が紹介された。(Van Wincoop教授は、私のボストン大学時代の国際金融の講義の担当教員であった。)計量経済学セミナーで報告される論文は、私には難解なものが多いが、実証を行う上での興味深い示唆が得られることが多く、Princeton大学のWatson教授による“Testing Models of Low Frequency Variability”では、アメリカの20のマクロおよび金融変数に、新しい時系列分析手法が応用されている。

90年代前半に留学していた時と比べて淋しく感じたのは、日本に関係のある研究の報告がほとんどなかったことであった。私が聞いた唯一の日本に関連した研究は、国際経済/開発経済セミナーでのPrinceton大学のHyun Shin教授による“Industrial Structure and Corporate Finance”(日米のプロダクション・チェーンの複雑さの違いが両国のコーポレートファイナンスの違いに関連することが実証分析で示された論文)であり、トヨタ自動車

の実証例が紹介されていた。

余談－ニューヨーク・クィーンズのER

最後に、この留学中の緊急救命室での体験について、余談として触れたい。私は、ボストンに留学した5年間、一度も病院にかかることはなく、数回、大学の診療所で診てもらっただけだったが、今回は何度か病院の世話にならざるをえなかった。私は東京海上日動の海外旅行保険に加入していたので、通常は提携病院である東京海上記念診療所に行き、場合によって専門医を紹介してもらった。

2007年の冬にコネチカットに友人と出かけた時に、ひどい吐き気と悪寒が起きてしまい、車で3時間ほどのニューヨークの自宅に戻るのが無理そうだったので、東京海上日動のサポートデスクに電話し、その近所の病院を紹介してもらった。そこで2時間ほど点滴をしてもらって吐き気と熱も治まり、処方された薬を飲みながら、ニューヨークへどうにか帰ることができた。この診療所はとてもきれいで効率的、静かという印象しかないが、私自身の問題で意外に感じたのは、病気関連の英語がかなり良く理解できたことである。私の「英語力」は、ボストンに留学していた時より低下してしまったと日ごろは感じていたが、病気に関する英語については、アメリカTVドラマ「ER緊急救命室 (NBS: 1994-2009年)」のファンであったおかげで、かなり理解でき、また病状を表現し話すことができたのだと思う。

2008年の12月24日クリスマスイブに、友人とマンハッタンで人気の「オイスター・バー」で昼食に牡蠣を食べて帰宅すると、ひどい吐き気が止まらなくなってしまった。前日に少し体調が悪くて診療所で検査をしており、また、数日後にはカリフォルニア出張の予定もあったので、午後8時頃、東京海上日動のサポートデスクに相談の上、アパートのすぐそばにある「マウントサイナイ病院クィーンズ」の「ER緊急救命室」に行くことにした。

病院の受付でまず病状や保険について説明が終わると、すぐにカーテンで仕切られたベッド14号に案内され、血液検査の採血や点滴が行われた。点滴で吐き気がおさまれば帰れるかと思ったが、血液検査に異常があったようで、PETスキャンをするから1.5リットルほどの液体を15分に1杯ずつ飲むように言われた。この液体を飲むのはかなり大変で、2時間ほど飲んでも飲み終わらなかったが、少し残しても良いことになってPETスキャンをした後、内臓のある器官が腫れているとのことで、病院の専門医の診察を受けることになった。専門医は翌朝8時にならないと来ないので、結局、そのベッドで夜明かしすることになった。

マウントサイナイ病院クィーンズの緊急救命室は、中央のナースステーション（事務）の周りにカーテンで仕切られたベッドが並んでおり、私のベッド（カーテンの14号）から、かなり多くの病人の様子が見られた。様子を見に来てくれた友人は、ナースステーションの奥に大きな電光掲示板があり、病人の状況（どういう段階にあるか）が明示されていて、看護師や職員への「見える化」がなされていると、とても感心していた。担当医や担当看護師はきちんと決まっていて自己紹介もしてくれていたが、誰でも病人の把握ができるようにしてあるのである。

朝の7時になると、夜の担当医（インド人）が朝の担当医と一緒にベッドを回って引き継ぎを行い（私は「専門医の診察待ち」）、看護師も夜の担当から朝の担当に引き継ぎがされ、夜担当の人たちは「お大事に」と言って帰っていった。

私のベッドからみられた「ER緊急救命室」の病人の様子は、全くテレビで見たまま（ただし1990年代の初期シーズン）と言ってよかった。貧しい人や問題がありそうな人と、普通の人が混在していた。シカゴの病院であるテレビのERのような外傷患者はいなかったが、母親が連れてきた麻薬中毒で暴れる娘（20歳代？）をみんなで押さえつけて治療したり、看護師が酔っ払いの治療と掃除に辟易としたりしていた。私の隣のベッドでは、夕食後に急に気絶した母親をヒスパニックの家族が連れてきたが英語が理解

できるのが16歳の息子だけであり、付き添いは一人までのルールなので彼だけが付き添っていた。幸いこの母親がすぐに退院すると、次には施設暮らしの老人が入り、「病気ではない」と担当医が何度も説得しても帰ろうとせずずっとそのまま寝ていた。PETスキャンに向かう途中に通った廊下にも「Hallway #3」等と番号が付けられたベッド（深夜には酔っ払いなどの患者が増えた）がいくつもあった。

私は、朝9時頃に専門医の診察をようやく受けることができ、深刻な状態ではないので日本に帰ったら主治医に相談するように言われて退院した。この時の治療費はすべて東京海上日動の保険でカバーされ、キャッシュレスで行われたが、数千ドル単位のかかなり高額を支払がなされたようであった。よく言われているように、アメリカでは医療保険を確保することは非常に重要である。

おわりに

思いつくままにニューヨーク大学留学での体験を書き進めたが、本当に様々な興味深い経験をする事ができたと、改めて実感した。計量経済学はじめとする理論の習得や共同研究の成果では、もう少し頑張りたかったと思うことも多かったが、残された課題について、今後、さらに勉強を進めて行きたい。ニューヨーク大学での研究以外にも、ここでは書けなかった様々な有意義な経験ができた。このような機会を与えていただいた法政大学経済学部教授会に深く感謝したい。